

上ホロ北西稜

2016年11月27日

L フクイエ、小野(む)、栗山、渡部(ゆ)

冬の上ホロは登山を始めた10年前よりほぼ毎年訪れ、ピークをはじめ、八つ手、化け物、正面壁と登ってきた……が、登攀はすべてフォローであった。

う～ん、これを登ったと言えるか？行っただけだろう。

と言うことで、何度も行っている上ホロ入門とも言える北西稜ヘリーダーとして登った。

メンバーは、睦男さん、栗山さん、ナベちゃんの3人。上富良野駅での前泊も酒をほどほどにして就寝。翌朝7時凌雲閣Pでナベちゃんと合流し出発。スキーのビンディングに靴が合わなくシューで行くが、年寄りには堪える。

安政火口のいつもの場所でスキー等をデポしアイゼンに替える。視界もほどほどで尾根取り付きも間違えず第1岩峰を登る。何かの記録で「岩峰はすべて左を巻く」と載っていたため、この後も取りあえず左の様子を伺いに行くがほぼ当てにはならなかった。

第2岩峰を越して直ぐのトラバースが厭らしい。雪の付きが良く睦男さんは「リッジを行けば」と言うが、以前リッジで行き詰まりトラバースに替えた事もあり悩んでいると、後方より栗山さんの知り合いのパーティが追いつき先行してもらった。見るとサクサクとリッジ上に行く。なあ～んだと（後の人は何とでも言える）我々も後に続く。

最後の岩峰基部に到着。ロープを出すべくカムで支点を構築。トップで登る気満々で来たのだが、悪天でもあり、ここに至って弱気の虫がでて「栗山さんお願いできないかな……」と口に出すと……すかさず

「今日は福家さんの山行なんですよ。おいしいところ人にあげてどうするんですか！！！！」とナベちゃんの檄が飛ぶ。

おいおい、誰が登るかリーダーの俺が決めてもいいじゃないかと思いつつ、何か今山行の私の目的と、それに対し心の折れた自分の心を見透かされたようで悔しく

「そんな怒るなよ。行くよ」と決心する。

今まで4回フォローだが登っている。少しも難しいところはなかった。サクサクと気持ちよく斜面を登るだけだ。ランニングもほとんど無かった位だ。

だけどいつも今回の取付より5m程右側の残置支点から右に回り込んで登った。今日は新たに構築した支点から直上だ……。まあ上で右にトラバースしたら良いだろう……。などと考えながら登り始める。

10m程直上した後、右へ向かおうとするがエビの尻尾が行く手を阻む。たたき落としながら進むが、その先もずっとエビの尻尾だ。左に目をやるとルンゼが見え、覗くと登りやすそうに見えた。ロープの流れは悪くなるが左に移りルンゼを登ることとした。

ところがこのルンゼ、私に対しては甘くなかった。雪が中途半端に付いているだけでアックス、

アイゼンが効かない。支点作りも難儀しイボハーケンを持ってこなかったことを後悔する。あんなに「イボハーケンは？」と皆が持たそうとしていたのに、「どうせランニング取れないから」とか言って断った自分を呪った。それでも必死に岩を掘り出しクラックを見つけ、トライカムをセットし「ああ～トライカム」と、トライカム一式を渡してくれた栗山さんに感謝する。

なんとかルンゼを抜け出ると、そこは岩峰のすぐ脇であった。ここからコルに向かい少し進むとロープ一杯。ハイマツもハーケンを打てる岩も無く怪しげな支点をつくりスタンディングアックスビレイで後続を確保する。屈曲しているためロープが目茶重い。登攀開始からここまでなんと1時間半。

ナベちゃんを上げ、その後睦男さんを確保していると、ナベちゃんに確保された栗山さんが先に上がってきて私を見て

「駄目だダメだ。ロープが全然張って無くて睦男さんが上がれない。3～5mたるんでいる」と指導される。思いっきり引っ張っているつもりでもまだまだ駄目なようだ。

14時、睦男さんも上がり、そそくさとピークを踏みD尾根から下山する。凌雲閣Pに着いたときは薄暗くなっていた。

悪天のなか1時間半以上も待たせ申し訳なかった気持ちでいると、慰めか皮肉か「シーズン始めの良い耐寒訓練になった。本当良い耐寒訓練だった。」と皆に言われた。そして、ずっと凹んだ気持ちのまま帯広に車を走らせた。

ホロ苦い、そしてほんとの上ホロ北西稜デビューでした。

(記 : kame)